

石畳の敷かれた街道のすぐそばまで、色とりどりの花が咲き誇っている。その上を吹き抜ける風さえもが、甘い香に染まるようだ。

地面に虹が降りてきたかのような景色が、この地域独特のものであった。周囲から一段盛り上がった高地にあるこの一帯は、長く冬に閉ざされる。ようやく溶け始めた雪に迫り立てられるように、春はある日突然、一斉に目を覚ますのだ。

数え切れないほどの花々が咲き誇るその台地の中央に、ヴォルヒーズの街は位置している。

この季節、ヴォルヒーズは祭り一色に染まる。花を愛で、これから巡りくる短い実りの季節を招くための、盛大な祭りが、街をあげて行われるのだ。

高地ゆえに冬が厳しく、決して実り豊かとはいえないだけに、春の訪れはすべての人々の喜びなのだ。

花の祭典を待ち望んでいたのは、街の人々だけではない。束の間の祝い事に稼ぎを求めて国中の商人たちが品物を持ち寄り、観光客も押し寄せくる。花が咲き乱れる一月あまり、ヴォルヒーズは多くの人であふれかえるのだ。

「やあ、今年も来たね」

街の中心にある大きな広場、その中でも特に目を引く場所に、屋根代わりの天幕を張った舞台が造られている。槌の音が軽やかに響くそこに近寄ってきた初老の男性が、幌を固定する杭を

うちつける男に声をかけた。

「ああ、ご無沙汰してます。元氣そうで何よりだ」

顔を上げた男は、恰幅のよい腹を揺すりながら立ち上がった。額に浮いた汗を袖口で拭い、土に汚れた手を服に擦りつけてから差し出した。

「団長さんまで設営に参加ですか。大変ですね、人手が足りない訳でもあるまいに」

「いえいえ、うちは半分以上が女ですからね。稼ぎ頭の踊り子たちにこんな仕事を頼んだら、愛想尽かされてしまいますよ」

団長と呼ばれた男は、ふうと荒い息を吐いて苦笑を浮かべた。なるほど彼の言うとおり、天幕や子供の背丈ほども高さあるがっしりとした舞台を組み立てているのは、男たちばかりだ。華やかな、多少肌の露出が多い衣装をまとった女たちは、組み上がった舞台の飾り付けにいそしんでいる。

団長と呼ばれたジャレフ率いるアトライア舞踏団は、軽快な踊りを見せ物とする一座だった。女性たちの艶やかな舞と、青年たちの軽やかな踊り、そのどちらもが評判が高く、どこで興業を打つても間違いないと言われる実力を誇っている。ひっきりなしの興行依頼に年中旅から旅への忙しい一座だが、春の祭りの間だけは毎年ヴォルヒーズに腰を据えるのが決まり事だ。春の訪れを祝うにふさわしい出し物は街の人々からも人気を集め、広場の中でも一番よい場所があてがわれている。

彼らの天幕を目にして、ああ祭りが始まるのかと実感する者も少なくない。

「今年はいつから幕が開くんない?」

ジャレフに声をかけた男性も、待ちきれないというように目を細めた。

「あらおじさま。お久しぶりね」

その男の腕に、柔らかな手がそつと添えられる。振り向いた男が笑みを深くした。

「やあカツツエ。また一段と綺麗になったね」

「ありがとう。お世辞でも嬉しいわ」

明るい茶色の髪を高く結び上げた女性がにこりと笑う。カツツエと呼ばれた彼女は、一座の花形を務める踊り子だった。切れ長の目元も涼やかに大人の色気をまとう彼女には、あちらこちらから求愛の声が絶えないという噂だ。

そんな女性に寄り添われて悪い気がするはずもなく、男の頬はゆるみっぱなしだ。

「早く君の踊りがみたいね。今団長にも聞いていたんだが、いつから舞台が開くんない?」

「そうね。明日中には設営が終わる予定だから、早ければ明後日には幕を開けるわ。楽しみにしててくださいる?」

「ボクもね、一杯踊るよ!」

元気な声が響いて、その持ち主がどんと男の腰に飛びついた。

「こーら、ライリオン。急にぶつかつたら危ないでしょう!」

「いや、大丈夫だよこれくらい」

一瞬よろけた男は、視線を落として笑みを深くした。

「大きくなったなあ、ライリオン」

腰に抱きついてきた少女の頭を、少し乱暴に撫でてやる。

「あのねあのね、今年はボク、真ん中で踊るんだよつ!」

「そうか、そりゃあ楽しみだ。しつかり見ないとなあ」

まだ女性としての色香の薄い、あどけない少女に答える男の顔は、久しぶりに孫を見るように暖かい。

年に一度しかあわない踊り子たちが翌年にぐんと実力をつけているのを見るのも、この街の人々にとっては楽しみの一つだ。特にこの男勝りな少女は、昨年の春人々の視線を釘付けにした。ヴォルヒーズでは初お目見えだった去年、彼女は小さな身体はどこにと驚くほどの闊達さで舞台の上を跳ね回っていた。集まる視線に物怖じしたそぶりもみせず、堂々と、そして華麗に舞って見せた少女に、多くの観客が惜しみない拍手を送ったのだ。

この子は踊りの神様に愛されている。そう表したのはだれだったのだろうか。

その少女が一年たってどれだけ腕をあげたのか、男にとつてはお世辞ではなく楽しみなことだった。

「じゃあライリオンが看板娘になる日も近いなあ」

「あら。この子の見せ場は一幕だけよ。そう簡単に譲つてたまるのですか」

男に腕を絡めたまま、カツツエが口を挟む。冗談めかした笑顔はそのままだが、わずかに本音が混じるのが隠し切れていない。

だが、それがいいのだ。

たとえ相手が子供だろうが、同じ舞台にあがるものとして対等の競争相手として扱う。踊りという一点においては年齢も経験年数も関係ない。その意識が当たり前に根付いているからこそ、一座は国中に名を馳せるほどの実力を手にしているのだ。

「そういえば、ルデイスはどこに行った？ あの子も出るんだろう？」

女たちの諍いともいえない会話を目を細めて聞いていた男が、周囲を見回し首を傾げた。

「あら、そういえば……」

「さつきから見えないよー？」

女性陣も不思議そうに顔を見合わせた。

「団長、ルデイスは？」

「ああ、ちよつと使いに出したんだが。そういえば遅いな……」  
二人に話し相手を任せて天幕張りに戻っていたジャレフも、あたりを見回して首を傾げている。

ルデイスは、一座では数少ない男性の踊り子だ。このヴォル

ヒーズの生まれで、団長に声をかけられて一座に入った。今では花形の一人としてアトライアの看板を背負っている。

街の出身者が一座の花形を務めるとあつて、鼻屑にする者も少なくなない。

「何よこの忙しい時に。遊んでたらただじゃおかないから」

カツツエが柳眉を顰めたところで、パタパタと慌たらしい足音が近づいてくる。噂の張本人が息を切らして駆け戻ってきたのだ。

「団長！ あのさ、さつきそこで……！」

「こらルデイス、遅いじゃない。どこで油売つてたの！」

息せきぎつた声に被せるようにカツツエがしかりとばす。目を見開いた青年の顔が、マズイ、と言わんばかりに歪んだ。

「うちは手が少ないんだからね！ 遊んでる暇ないのわかってるでしょう！」

「わ、分かつてるつて！ 遊んでた訳じゃないよ。団長、ほら頼まれてた書類、ちゃんともらつてきたからね！」

重ねての声から逃げるようにジャレフの元へ駆けていったルデイスが、紙束を押しつけている。

くせつ毛の強い黒髪とあどけなさを残す大きな瞳ののせいで年齢より幼く見られがちだと嘆いているルデイスだが、カツツエに叱られて首をすくめる姿はむしろ子供のようだ。

遊んでいなかつたという証明ができて一息かと思いきや、ジ

ヤレフと舞台との間で視線が泳ぐ。

「何かあったかい?」

「あ、あのさ、俺——」

ルデイスは束の間迷うように言葉を切った。だがぐつと唇が引き結ばれたのは一瞬で、明るい緑色の双眸が意を決したようにジャレフを見る。

「俺、今年の寄巫、立候補したい!」

「——はあ!」

力強い宣言に、ジャレフだけでなく周囲の者たちも驚きの声を放った。

「い、痛! 痛いって!」

「うるさい!」

舞台裏に設けられた控え室兼荷物置き場に悲鳴が響く。

興行に向けて衣装や小物の確認に余念のない踊り子たちが、驚いて顔を上げた。

「カツツエ、耳、耳引つ張るのはやめて——」

「うるさいって言ってるでしょ!」

涙目のルデイスと肩を怒らせるカツツエの組み合わせはいつものことで、またあのお調子者が何かやらかしたのかと、踊り子たちの間にはすぐに苦笑いが広がった。

「つたく。あんたは馬鹿だ馬鹿だと思ってたけど! 寄巫に立

候補なんて一体何を考えてんの!」

「だって……」

赤くなつた耳を押さえながら、ルデイスは涙目でカツツエを見上げた。両手を腰に当てたカツツエがそれを睨み返す。

「まあ、カツツエ、ちよつと落ち着きなさい。ルデイスだつて思いつきで言うような子じゃないよ。とりあえず話を聞こうじゃないか」

「だって父さん! どう考えても無理じゃないの!」

怒りの視線は、後を追つて入つてきたジャレフに向けられる。娘の剣幕になれている団長は、なだめるように一つ頷いて見せた。一緒に入つてきたライリンは完全に面白がつて三人を見つめている。

寄巫とは、祭りの最後に行われる神々への奉納舞を捧げる踊り手のことだ。短い実りの季節が今年も豊かであるようにと祈りを捧げる、大事な役割を担っている。

男女一対で舞われる奉納舞のうち、大地の神に扮する男性の踊り子が寄巫、春の化身に扮する女性が巫女と呼ばれる。そのどちらもが未婚の街の出身者でなければならないという決まりだ。

巫女は半年以上前に街の有力者たちの推薦で選ばれるが、寄巫は祭りの開始と同時に立候補を受けつけ、観衆の前で踊りの

出来映えを審査されて決まる。

半分くらいは客寄せの目的もある選考方法だが、誰が立候補するかは毎年皆の大きな関心事でもあった。

「あなた、うちの団員だつて自覚あるの？」

ルデイスはヴォルヒーズの生まれだから、立候補する権利はある。だが観光ではなく興行のために戻つてきている以上、舞台と巫巫との両方を取ることは難しい。男性の中では花形といえる役割だけに、彼の不在はあり得ない。カツツエが頭ごなしに否定的なのはそのせいだ。

「だつて……」

ルデイスは子供のように唇を尖らせた。

「カツツエ、ちよと座つて落ち着きなさい。おまえがその劍幕

じゃ、話が進まないよ」

「だつて父さん！」

「カツツエ。とりあえず、話は聞いてやろう」

ジャレフは穏やかな顔で一人娘を制した。誰からも人がいいと評判の温厚なジャレフに代わつて一座を切り盛りするカツツエは、分かりやすく気性が荒い。普段は娘の劍幕に苦笑いで譲ることも多いのだが、このときばかりは静かながら座長としての威厳が滲んだ。

「ああもう！ 父さんは甘いんだから！」

話を聞くという意思表示に柳眉をしかめたカツツエは、鼻息

も荒く荷物の箱に腰を下ろした。

腕を組んでルデイスを睨む視線には、ふざけた理由だったら許さないという怒気が宿っている。

「だつて……」

その視線から逃げるように顔を背けたルデイスが、さすがにうにジャレフを見た。

「だつて、今年の巫女、ケイトなんだよ」

「あ……」

告げられた言葉にジャレフは軽く目を見開き、カツツエはうめき声をあげて天井を仰いだ。

ライリーンが黒い双眸をきらきらさせながら、事の成り行きを眺めている。

「そりゃあ、立候補したいつて騒ぐわけだ」

ややあつて、ジャレフが呟く。その声には明らかに愉快げな響きが宿っていた。

ケイト。

その名前を知らない一座の人間はいない。

ケイトは、ここヴォルヒーズで手広く商いを手がける商家の令嬢だ。一座に好意的な彼女の父は、毎年興行資金の一部を負担してくれているいわば上客で、ジャレフとは懇意の間柄だった。父や兄に連れられて舞台を覗にくるおとなしい少女の姿を誰もが目にすることがある。

だが、皆がケイトを知っている理由はそれだけではない。他でもないルデイスが、かれこれ何年も片思いを募らせている相手だからだ。

父親に連れられて舞台上やってきた少女にルデイスが一目惚れしたのは、まだ彼がようやく舞台上に上がれるようになったばかりの頃のことだ。まだ新米で一幕踊るのがやつとの彼は、頑張つてねと掛けられた声とそのときの笑顔に一瞬で恋に落ちたのだ。

ルデイスが一座の花形に急成長を遂げたのが、偏に彼女に自分の舞台を観てほしいという願いだつたのは、誰もが知る微笑ましい秘密だ。

年に一度、それもよくて数度舞台を見に来るだけの相手のために必死で努力するルデイスの姿を、一座の者は好意的に受け止めている。最初の一度以来まともに言葉を交わしたこともないくせに、彼女が来ると知れば目の色が変わる。そんな初々しくもどかしい恋い模様を、皆が心の中で応援しているのだ。

だからこそ、今年の巫女がケイトだと知らされて、ルデイスが浮き立たない訳がないのだ。

「あんたって子は……」

仰のいていた顔を俯げ、右手で額を押さえたカツツエは、堪えきれずに溜息をついた。

数年来の片思いの相手と踊れるかもしれない。その可能性だ

けでルデイスが舞い上がったのは、想像に難くない。興行がどうとか、自分の出番がどうとか、そういうことは全部頭から消えて、掛け戻ってきたのだろう。

「カツツエは反対かい？」

ジャレフは、笑いを含んだ問いを一人娘に投げた。最初の驚きが去つて、彼の中では肯定的な思いが勝っているらしい。团长として纏めなければならぬ最低限だけはきちんと押さえる彼がそんな風に問う時は、いつも答えは決まっている。

「父さんってば……」

カツツエも父の気性は熟知している。嫌そうな雰囲気を感じてもせずに溜息を重ねた。

一座の締め役。彼女は自分の役回りをそう自覚している。基本温厚な座長と、元氣あふれる若者たち。そんな危なっかしい集団の手綱を引くのが彼女の仕事だ。

普段ならばカツツエの判断をあつさり受け入れる父親があえて答えを求める時は、ちよつと冒険してみてもいいんじゃないかと考えている時なのだ。

あとは、彼女が頷くかどうかだ。

だからこそ、カツツエはこれ見よがしな溜息をつけてみせる。

「カツツエ、俺だつて無理言つてるのは分かつてるよ。でも、ダメかなあ……？」

こぼれた溜息に重ねるように、ルデイスが絶つた。